

2-1-3

Playful Pedagogy とは

子どもの「遊び」をはぐくむ保育者： 育ちを見通した「学び」の多様性

秋田喜代美

Akita Kiyomi …………… 東京大学大学院教授



東京大学大学院教育学研究科教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。専門は保育学、教育心理学、授業研究。現在、日本保育学会会長、日本読書学会会長、World Association of Lesson Studies, Vice President、日本発達心理学会理事等を務める。日本教育心理学会城戸研究奨励賞、日本読書学会読書科学研究奨励賞、(財)発達科学研究奨励賞等を受賞。著作に、『保育のおもむき』（ひかりのくに）、『学びの心理学』（左右社）、『保育の心理学』（全国社会福祉協議会）など多数。

● あこがれ、 夢中になる遊びの経験

充実した遊びの中で、子どもたちは、仲間づくり、世界づくり、そして、自分づくりを行っている。遊びの経験の中で、他者にあこがれ、ものに惹かれ、そして、自分の思い描く世界と一体になって、今の自分とは違うものになりきり、遊び込む。つまり、それは遊びを通して、①他者と出会い、②ものと出会うことであり、夢中になることで、③出来事の中の役や世界に自らを同化し、④見立てやファンタジーの世界に生きるということである。それが乳幼児の育ちの源となる。ある行為を模倣し習得するだけでなく、自分たちでその遊びを⑤持続発展させていくことで、対象とのかかわりや仲間との

かかわりを深め、新たな自己表現へと形を変えていく。これが新しい文化創造となる。遊び込むことで、子どもはもう一つの可能性を日々開いて育っていく。幼稚園や保育園での集団保育における暮らしの中では、さまざまな場面で、振る舞いのかっこ良さや美しさにあこがれ、物や事象のよさや不思議さに惹かれることが生まれている。

近年では、保育に関してさまざまな学術理論や保育原理があり、保育がもたらす、その後の育ちへの効果が実証的に数値で語られてきている。しかし、子どもの経験から保育を考えるならば、安心感や居場所感の中で、文化的に価値あるものに出会い、夢中になり、没頭する時間、その子が生き生きとする時間がより長くあることが、保育の質の豊かさとして最も大事である（秋田ほか、2010）。

● 遊びをめぐる学術的議論 としてのPlayful Pedagogy

近年、遊びこそ乳幼児期の教育のあり方として大事であるということが実証的にデータが提示されて、その効果の有無や要因との関連性をめぐり、海外で議論がなされている (Lillard et als, 2013; Weisberg, Hirsh-Pasek, & Golinkoff, 2013a, b)。その中で、保育者に“Guided play”ガイドされた遊びの有効性や“子ども間の考えを共有すること=sustained shared thinking”など、保育者の役割に目を向けた語りがなされるようになってきている。Guided playは、子どもの自発的な自由遊びと、保育者の教育的意図を伴った指導の間にある保育のあり方の総称として捉えられている。

なぜGuided playが重視されるのかといえば、子どもが夢中になって取り組む方が直接的な指導よりも社会情緒的発達、言語発達等に有効 (Lillard et als, 2013) と考えられるからである。つまり、自由遊びや発見的な学びの要素 (おもしろい、自発性、柔軟性) と、意図的な教授の要素 (外的な目標、積極的な関与) の両方を、Guided playは含んでいる。また、Guided playは、ストレスを低減し、喜び・誇り・自信や社会的絆を育てるとされ (Diamond & Lee, 2011)、子どもの育ちの下ごしらえ (mise en place) をしていると表現する報告もある (Weisberg et als, 2013)。これらは数量的な実験的観察研究に基づく遊びの効果の研究である。さらに、社会文化的活動理論の立場からも、Hedegaard (2012) は、遊びの中では、要求・意図・動機の間で生じる緊張や葛藤から新たな課題が生まれ、子どもがどのようにして、その要求を統合し、折り合いをつけていくのかというところで



図1

学びや発達が生まれると指摘している。年齢により、そのあり方は異なり、保育者への要求、援助として何が求められるのかは変わってくる。

子どもは何かを学ぶために遊ぶのではなく、遊びたくて遊ぶことが大事である。だが一方で、私が大事であると考えるのは、その遊びの中で何がその子の今にとって“学びの対象”として重要であるのかを保育者が見定めるということである。学びの多様性理論を唱えるLo (2012) は、その理論の中で、①教師が経験させたいと思っていることについての、子どもの理解やかかわりについての多様性、②学びの対象をどのように扱うのかという教師の理解の多様性、③具体的にデザインに対してどのようにガイドしていくのかという行為の多様性の3つを指摘している。同じ遊びでも子どもによる多様性、それらを理解し意味づける保育者の多様性、さらに具体的な行為としての多様性があり、それを自覚することが子どもを理解し実践を理解するうえで大事なことであると考え。—— 図1

● 事例を通して、遊びの中の 学びの多様性を考える

ある子どもが廃材の箱でへびを作ろうとしている。それを見た子どもたちもまた作

り始める。しかしそれをよく見ていると、廃材はそれぞれ同じ箱がないことから多様性が生まれる。また子どもによって精緻に作ることで満足する子どもいれば、大きなところで似た形ができればそれでよしとする子どももいる。それぞれに作りたいヘビのイメージも違っている。そこで興味深いことは、このようなときに子どもたちは、ハリーポッターに出てくるヘビを作ろうとファンタジーの世界に生きるると同時に、図鑑でヘビの姿を見て、より本物らしいものにしようと工夫を凝らすことで、科学的な事実にも出会っている。こういうジグザグを認めることが日本の保育の良さであると考えられる。

また、空き箱をできるだけ高く積む運動会の競技「運んでハイタワー」という1つの目標に対して2つのクラスが挑戦していく過程（かえで幼稚園DVDより）を、この学びの多様性という視点から見ると、練習試合を通して皆で協力し合う経験を積む中で、「積む」ことの質に、異なる多様な次元での気づきが生まれ、学びが深まってくることが見えてくる。ここでも、子どもは夢中になって遊んでいる。その夢中な協働の取り組みだからこそ、さまざまな学びが生まれている。挑戦的な活動に不安なく取り組み、その子の可能性が十二分に発揮されることに日々の中での育ちがある。ここで大事なことは、子どもの育ちに足場をかけるのは保育者だけではなく、子ども同士もまた相互に足場をかけ合えるような環境が準備されていることである。海外のGuided playの議論では、足場をかけ導くのは保育者として語られるけれども、1学級定数の大きい日本の保育の良さは子ども同士が高め合える場を十分に準備している点にあるだろう。—— 図②

変わらぬ目標	あおぞら組	太陽組
時間内に箱を積んで高さを競う	変化面と重要な特徴への気づき	変化面と重要な特徴への気づき
最初	積み方：大きい順から積み上げる	グループ間の作戦 踏み台の使用、芯を入れる 支え：長い箱を使って周りを囲む
練習試合 1回目まで	大きい順から積むと偶然風が吹いても箱が残る：勝ち 箱を接着しておく	風で跡形なく倒れる：負け 安定感のある積み方 基礎：1本だとぐらぐらするから基礎の幅を広げる 軸：穴をあけて通す。斜めに通すと早い。穴に通すのに時間がかかる。棒はいらない
風でも倒れない		
2回	積む回数：あらかじめ接続した箱を運ぶ方が少なくてよい	
皆で協力して早く積む		
決戦	不安定なものをまっすぐな大きなもので支え安定を図る 大きな支えを作る	頂上部分に少しでもかさのあるものを積む

図②

● 遊びを支える園の持論

この子どもの姿をご紹介した広島県のかえで幼稚園では、中丸元良園長先生が「できない部分にばかり焦点をあてないで、できる部分・できようとする部分を見ていくと子どもの素晴らしさが見えてくる」「遊びながら“知らず知らずのうちに”いろいろなものが身につくのが幼児教育ですし、そんな“しかけ”がたくさんあるところが幼稚園だといえます。ただし、どんな立派な“しかけ”でも、子どもたちが楽しいと感じて乗ってこなければ、意味がありません」と語っていた。ここには園長の実践に対する持論、保育の原理が語られている。このように実践に埋め込まれた理論としての持論が園で共有されることが大事ではないだろうか。

例えば、東京都品川区の東五反田保育園（2011）では「東五の掟として、①子どもの疑問に答えを出さない、②子どもの考えを否定しない、③関心のない子には直接働きかけない、④止める必要のある行為に対して、その子の気持ちを受け止めながら行為だけを否定する」という原理が導き出されていた。

また、同区西五反田保育園（2013）では「見

守る」ということについて、「0歳児クラスから子どもの意思を尊重すること、意思を尊重するには子どものやりたい遊びをやらせてあげること、子どもがやりたい遊びとは保育者がさせたいことを、こうしようとして押しつけるものではないこと、そして子どもがじっと見つめる姿・何だろうと思っている表情・やってみたいと動き出したとき、こんな様子を見守ること」という園長のメッセージを皆が共有し合っていた。

各園の持論を自分たちの言葉で表し、目に見えるようにしていくことが、子どもの具体的な育ちにつながる保育者側の学びの環境になるのかもしれない。保育者は「見とる、見守る、見通す、見定める」という4つの見方をしていくことが大事である。特に見通しをもって、いつどのようにかかわるか、抜けるかを見定めることが実践への即興的な判断となるのである。

● 子どもの経験から考える、 保育の環境と活動

子どもが安心して自分を出し、夢中になってかかわるために、私は以下のような環境を保証していくことが大事だと考えている。この図③のような活動や環境が保証されているかを振り返ってみてはどうだろうか。

子どもの経験から考える 保育の活動と環境の質	
<ul style="list-style-type: none"> ・安心感・居場所感を保証する環境 	<ul style="list-style-type: none"> ・夢中になることを保証する環境と活動
<ol style="list-style-type: none"> 1 身体が休まる 2 一人や仲間内だけで居られる 3 大事に見守られている感覚（温かさ、自然との共生） 4 私、私たちの場の感覚 	<ol style="list-style-type: none"> 1 関わりたくなる 2 利用しやすい 3 続けたいくなる 4 足跡がある 振り返り見通しができる

図③

最後に遊びについて好きな言葉を紹介したい。

「私たちは年をとるから 遊びをやめるのではない。遊びをやめるから年をとるのだ。」

(ジョージ・バーナード・ショー)

「どんな真面目な仕事も、遊戯に熱しているときほどには、人を真面目にし得ない。」

(萩原朔太郎)

子どもの遊びを支える大人の遊び心、共に遊ぼうとする気持ちを大事にすることが、遊びを導くという発想よりも大事ではないだろうか。

「遊びをせんとや生まれけむ

戯れせんとや生まれけむ

遊ぶ子どもの声聞けば

我が身さへこそ動がるれ」

『梁塵秘抄』

そこに日本の遊びの哲学があるように思う。

参考文献

秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊(2010)

『子どもの経験から振り返る保育プロセス』幼児教育映像制作委員会事務局

Lillard et als. (2013) The impact of pretend play on children's development:A review of the evidence. Psychological Bulletin,139 (1) ,1-34.

Diamond & Lee (2011) How can we help children succeed in the 21st century?

The scientific evidence shows aids executive function development in children 4-12 years of age. Science,333,959-964.

Hedegaard,M. (2012) Analyzing children's learning and development in everyday settings from a cultural-historical wholeness approach. Mind, Culture and Activity,19,127-138.

Lo,M. (2012) Variation Theory and the Improvement of Teaching and Learning. Gotheborgs universitet.: Acta Universitatis Gotheoburgensis.

Weisberg, Hirsh-Pasek, & Golinkoff, (2013) Guided Play;Where curricular goals meet a Playful Pedagogy. Mind, Brain and Education,7 (2) ,104-112.